

「宗教なき時代」の単独者：
キェルケゴールにおける「超越」と倫理学

藤枝真（大谷大学）

「超越」と倫理学の関係を語ろうとするとき、もしそこにキェルケゴールの思想が介入する余地があるとするならば、超越的なものと自己とが単独な関係を結ぶ「単独者」のあり方がまずは問題になるだろう。例えば、「単独者という問題が、わたしにとって一個人的にといいことでなく、思想家としてのわたしにとって一もっとも重要な事柄である」（『著作活動の視点』、1848年）というキェルケゴールの言葉に目を留めて、その上でそれを彼の青年期のよく知られた手記の次の一節に、すなわち「重要なのは、わたしにとって真理であるような真理を見出すこと。…いわゆる客観的真理をわたしが発見したとしても、それがわたしの何の役に立つというのか」（「ギーレイエの手記」、1835年）という告白に遡って結びつけるとき、彼の思想に関するひとつのイメージが避け難いかたちで設定されるだろう。それは、19世紀デンマークの市民社会成立期に生き、自らを「宗教的著述家」と称して「信仰とは何か」という問題に取り組んだキェルケゴールが、人間同士の関係に先行するようなかたちで他ならぬ自己自身が神と主体的な関係を結ぶことの意義を説いて、倫理に優先して信仰の絶対性を強調する「おなじみの」イメージと言うべきものである。

このようなキェルケゴール像にもとづいて「超越」と倫理学の考察に取りかかろうとする際に、キェルケゴールの思想に対しては明確な疑問が生じてくる。それは、『おそれとおののき』（1843年）に典型的に見られるような、一見して「信仰のために倫理を停止する」という姿勢がはっきりと打ち出されているがために、彼の思想には信仰の上での独我論的かつ反社会的な性質があるのではないかという疑問である。

たしかに、『おそれとおののき』の主題は、神の命令に従ってアブラハムが自分の子イサクを捧げようとするを巡るものである。しかしその一方で、奉獻行為そのものがひとたび実行されてしまったならば、単なる殺人行為に他ならないともキェルケゴールは考えており、『おそれとおののき』は超越者の命令を人間の倫理関係に単純に優越させるような結論をとっていない。それに加えて、『不安の概念』（1844年）では、通常の間人間関係における規範を考えることを「第一の倫理学」とし、それが扱えない個人が抱える罪の問題を考えるための「第二の倫理学」を想定したことも、キェルケゴールが単純に倫理学の廃棄と信仰の選び取りを提唱したわけではないことの証と言えよう。

19世紀当時に直ちに受け容れられたとは言い難かったキェルケゴールの単独者概念は、現代では例えばハーバーマスによって新しい文脈において読み直されている。キェルケゴールはヘーゲル哲学に抗してポスト形而上学的な人間のあり方を提唱した。もっとも、キェルケゴールの場合は超越を廃棄することなくその（唯一の）選択肢として留めていたのであるが、ハーバーマスは、ゲノム編集や遺伝子治療という現代に新しく登場してきた「選択肢」を選ぶ際に、「自分自身でありうること（Selbstseinkönnen）」というキェルケゴール的姿勢を、特定の宗教に依拠しない多元的な現代社会に有効なものであると位置づけている。超越すら相対化されている時代にあつて、キェルケゴールが言う意味での単独者が関係を結ぶべきものは、いまや「不在」の状態となっている。そのような中で、ハーバーマスが考えるような仕方で現代の具体的な倫理問題をキェルケゴールと共に考えることが可能であるだろうか。本発表では特に単独者概念に注目して考察していく。